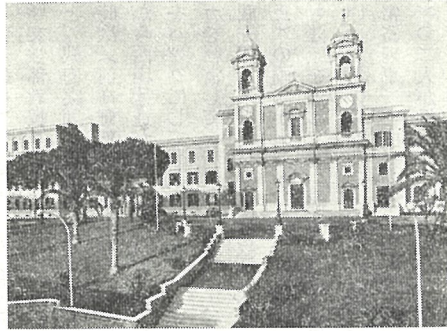


ローマの学校生活



ローマにあるミラノ聖心大学分校

難波順子

八年余り勤めた朝日放送を退社し、出かけることに決めた。六月になっていた。

さて、既に三度ヨーロッパを歩いている亭主が作ってくれた虎の巻をバッグに秘めて、ローマ郊外のレオナル・ダ・ヴィンチ空港に着いたのは七月二十七日午後一時すぎ。クラブへ出た途端に南の太陽が全身をつつみ、チーズに似た匂いがプンと鼻にきた。空港の建物に入ると、匂いが一段と強くなる。イタリア人の体臭だ。乾いた風にそれが揺れて、人間くさい第一歩であつた。

学校で――

われらの学校は有名なローマの終着駅からバスで五〇分、テベレ河左岸のモンテ・マリオの丘の上にある。授業は月曜から金曜まで、午前九時から午後一時まで。火曜は午後のクラスが一時間。水曜の午後、土曜の午前、そして日曜一日はローマ市内や郊外の美術館、教会、遺跡などのバス見学。宿題は毎日山のようにあるし、想像以上に厳しいスケジュールに追われて、手紙を書く余裕もなかった。規則正しい忙しさの中で、亭主のシャツやくつ下の心配もどこかへ吹っ飛んでしま

チーズの匂いするまで――

「機会があればイタリアへ行きたいと聞いていたので案内状を送ります」という山中孝氏（昭二十八年度法学部卒）の手紙を受け取

った。

語学中心の初級、文学・歴史、言語学など専門的な中級、上級、特別コースとも、英・独・仏・西の補助語学で授業をうけるわけだが、日本人の中には英語の判らない人もあつて難儀した。学生は約四百人で、アメリカとドイツの大学生が圧倒的に多かった。日本人は二十人で、カメルーンから一人で来ている青年もいた。ヨーロッパから遠い日本やアメリカ組がチャーター機を使って団体で来ているのに比べ、同じヨーロッパ各国の学生は個人参加、殆んどが中級以上のクラスで、真面目で勉強家が多かった。チェコの大学の助教授をはじめ、中学・高校の先生も見かけた。特別コースのディプロマをとると、ヨーロッパではすぐにイタリア語の教師が出来るそう、アメリカの大学でも、初級のディプロマが語学の単位になるそうである。一石二鳥のアメリカ組が多かったのもうなずけるが、日本組と同じで、観光気分がやや上廻っていたようだ。

聖心大学はイタリアの私立の名門で、門限は十二時、外泊禁止、華美な服装はオフ・リミットなど規律が厳しかったが、ヤンキーた

ちはバミューダ・シヨーツにギターやトランペットを抱え、オートバイを乗りまわして賑やかに暮らしていた。授業中でも居眠りをし、先生の英語をからかい、ドルの威力か数の威力か、週末の外泊許可をとってしまふ。外国に慣れない日本人は英語は不充分、イタリア語は片言とあつて、少々の不満は呑み込んで万事控え目なのにならば、アメリカ人は英語で押し通し、少しでも部屋が気に入らないと取り替へさせる。自分を変えようとせず廻りや相手を換えようとする。全く強引なゴーイング・アメリカン・ウェイである。これが、ヨーロッパ人のアメリカ嫌いの原因だと思つた。こんなことがあつた。フランス人、スイス人たちとアッシジへのドライブを企てた時のこと、運転の上手なアメリカ人を一人加えようとしただけで、計画がおじゃんになった。イギリス人の参加が少かつたのが目立つたが、その後二ヵ月ほど各地を歩いたときも、アメリカやドイツの団体にはたびたび出会つたが、イギリス人を見かけることは少かつた。ポンド危機で外貨の持出し制限をしているお家の事情がうかがえて興味深かつた。去年の夏のヨーロッパはドルとマルク

が巾を効かせてたと言えようか。

さて、大食堂や教室、見学バスの中などで友達が出来はじめるのだが、「始めにことはありき」だと痛感した。人間みな兄弟、言葉が判らなくとも心は通じるなどと言うのは大ウソだ。読み書きは出来ても会話の不自由な日本人は、どうしても友達が出来にくい。お互の身許調べ程度の会話力では一週間もすると種がつきる。最初のうちはあちこちのテーブルに散つていた日本人も十日もたつと、そろそろ集り出した。伊語を自由に話せる中級以上の人たちは別として、他の国の学生にもこの傾向はあつた。

二週間も過ぎると、言葉の不自由な日本人の中で教室での緊張に堪えかねて泣き出す人や半病人が出て来た。その上、食生活の違いが重荷になってくる。オリヅ油をたっぷり使つた料理を受けつけなくなるらしい。のん気者の私は、一度も日本料理を恋しく思つたことがなかつたが、一行の中の日本快男児日君とスパーマーケットでキュウリを買い、塩をして配ったり、知人宅からおにぎりを仕入れて来たりした。戦前戦後を通じて、一般国民レベルでは鎖国状態にあった日本人には、

二重三重のハンデが多すぎると痛感した。東洋の島国であるだけに、誰でもが、もっと安くもっと多く、海外へ出かけることが出来るような政治が必要ではないか。たとえ二、三人とはいえ自分の手銭で来た人が、その機会を一〇〇%楽しみ生かすことが出来ないのが、他の国の若者たちのびやかな暮しぶりを見るにつけ、くやしかった。

最後のディプロマのための試験を受けた日本人は六人だけ。しかし、判らないと言いながらも、皆片言のイタリア語で買物をしたりバスに乗ったり、けっこう通じていたようだ。私も、フィレンツェやヴェニスでイタリア語しか通じない小さなペンションに泊ったが、日常生活で困ることはなかった。

各国の若者たちと一カ月くらしてみて、それぞれ目的を持って勉強に来ている者が多い故か、ヨーロッパの青年たちには老成したものを感じ、アメリカの若者たちには少年少女の青っぽいイメージがあつたのが印象的だった。それぞれの背負っている歴史のちがいのだろうか。

ひとりりで歩く――

学校が終ると、日本へ帰る一行と別れて、フィレンツェを中心に北イタリアからスイスへ。ユングフロウにも登山電車で登り、バゼルからパリ、ロンドンまで気楽な一人旅である。心細いこともあったが、パリまでは全部汽車旅行。平均二食付千二百円程度のペンションに泊り、靴を三足履きつぶして歩きまわった。

フィレンツェもパリも楽しかったが、興味深かつたのはロンドンである。動いて揺れているのである。ローマやパリ以上に色彩が氾濫し、本家だけあつてパステルののぞきそうなるミニスカートのお嬢さんが闊歩している。ピカデリーサーカスにはモッズルックの若者が終日たむろしている。去年のファッション界でスカートを短かくさせたミニスカートの本家カーナビーストリートにも行ってみた。洋服から靴屋、おもちゃ、小間物屋までそろっていて、小間物屋にはイギリスの国旗をデザインしたエプロンやテーブルセンターが並び、黄金時代の英国の古本やエチケットの本書を売っている。モッズルックの店員も英国紳士風。イギリスの威光を回復しようとする若い世代の息吹が身に迫って感じられた。十二

月末にパリの知人から来た手紙によると、カーナビーの支店がパリに出来て本格的になぐり込みをかけて来たそうだが、ファッション界の若い世代の動きは、映画や演劇界の怒れる若者たちの動きの流れをくむという。ミニスカートやパンタロンスーツはロンドン中をかき廻しているらしく、ボンDstロートの老舗や、伝統ある百貨店にも限らずあつて、中年婦人が熱心に選んでいるのが印象的だった。

芝居も八つばかり観たが、オールヴウィックで国立シエクスピア劇団が、ヌーベルバーグの映画監督リチャード・ブルックを招いて「US」を演じていた。ベトナム戦争批判の前衛劇で、ベトナム戦争を続けさせているのは何もしようとしないうれわれ一人一人ではないか、と言う言葉が胸にこたえた。植民地支配の上に永い間眠っていた大英帝国は、今覚めようとして醒んでいるように私は感じた。

百日の旅はあつという間に過ぎ、お金さえあればもっともっと歩きたかった。

開拓のくわ

塩見三雄



年賀状を書くに際し、次のような歌を詠みました。

開拓のくわはねかえりし石地にも

今めばえけむ一粒の麦

この歌の背後には、いろいろな伝道生活の出来事がつつまれていきます。そのうちから少し御紹介します。

一 備 え

私は醍醐伝道の重要性を考えて、最初からより十分な活動の出来る家が欲しいと思っただ。そのために祈り、関係者の助けを得て現

在の分譲住宅購入の恵みを得たのですが、しかしその時に必要な代金のうち、二十万円の都合がどうしても出来なかったのです。とっさに思いうかんだのが、明石老人ホームの園長夫人Yさんのことでした。

それは随分乱暴な話なのです。私の過去六年間に、Yさんは教材の点訳奉仕を報酬なしで引き下げて下さった。言わば報われない存在の間柄でした。けれども私は、老人ホームを訪ね、二日間滞在した。しかし、どうしても借金の話を持ち出すことが出来ずに、老御夫妻に別れたのです。

家に帰ってはみても、醍醐伝道の前途を思うと、じっとしておられず、「主よみ意を成させ給え」と念じつつ、Yさんに借金の申し入れを、卒直な言葉で書きおくりしました。すると二日後「すぐに取りに来なさい」という電話があった。私たちは約束した日時に園を訪ね、御夫妻の前で小さくなって座った。

「園拡張のために土地を買い、借金は多くあるが、福音伝道はそれ以上に大切なことですから」と、説教めいたことも言われず、借用証なしで、その大金を郵便局で手渡して下さった。

二 第 一 歩

味噌汁にふのういたる喜びを

主にありて、讚美するかな

夕食をこのように楽しくすごしたのは、四月の末、初めて謝儀を頂いた日でした。イエス様の弟子たちが、何一つ持たされずに伝道におくり出されたことを思い、私も主

の祝福を信じて、貯えもないままに醍醐の地に來たのです。知らぬ土地で、頼るべき人もなく、日の出と共に起き、そして祈り、日中は南山科から六地藏にいたる、広い地域をとぼとぼと家庭訪問をして、道ばたに生えている芹を摘んできては夕食の味噌汁のうかしにしていた。

こうしたある夜、単調な副食に三才の寛子が「こんなおかずはいやや」とぐずりだした。家内は「そんなわがままを言っではいけません、神様にあやまりなさい」と、お尻をピシャピシャたたいた。寛子は、泣きじゃくりしながら「神様かんにして下さい、これからわがままを言いません」と、とぎれがちにお祈りをした。それをききながら私たちは齒をくいしばって涙をこらえ、それから感謝のお祈りを共にしたが、それからまもなくして謝儀が与えられたのです。そして家内は、ふのういた美味しい味噌汁を作ってくれたのでした。

六月上旬のある朝、寛子の牛乳をとりに表に出た。その時近所の方が「お早うございませす」と声をかけてくれた。私は部屋に入っている「声をかけてもらった」と家内に言っ

た。この地にきて一ヵ月半たって、初めて他人から声をかけてもらったのであった。実に嬉しい日でした。

三 歩 み

それからしばらくして、近所のある老人が「肩をもんで下さい」とやってこられた。白杖を持っている私をマッサージ師と思いこんでいる様子でした。「マッサージの勉強は、したことないのですが」と言う。「お宅の奥さんが『一度いらっしやい』と言われたので來ました」と言うのです。この老人は、昨年の台風で家の下敷きになり、腕を肩下十センチぐらいの所で切断されたが、その後の治療が十分でなく、肩が痛むということであった。私はイエス様が弱い者に同情され、いやされたことを思い出し「出来るだけやってみましょう」と肩をもみはじめた。十五分、三十分、一時間近くたっても老人はだまってじっとしている。私は指が痛みだしたので「これくらいでいいですか」とたずねた。すると「おいくらですか」と財布を出されたので再びおどろいた。「お金はいりません。祈らせて下さい。」私は老人の肩に手をおいて主の

あわれみがありますようにと祈ったが、それは土地の人と祈った最初の出来事でした。しばらくして帰ってきた家内は「今日あのおじいさんの顔は輝いていましたよ」と言った。私のだまって出した指をみて「血がにじんでいるけどどうしたの」と話をきいた家内は心から喜んでた。翌日老人は、残されたみじかい腕をビクビク動かしながら「こんなに動くようになりました、今日も頼みます」と言うてこられた。

大工さんの家を訪問した時のことである。

「どうぞ一度来て下さい、御主人の仕事があるかもわかりません」と、言ったとたん、ハッとした。家内が私をつねったのである。私は、言っではならない無責任なことを言ってしまったのである。私が責任をもって言える言葉は「主の救い」だけなのでした。帰り道で、私は敗北の気持ち一杯で「すまん」と家内にあやまるばかりでした。

四 希 望

十月の祝日にAさんが來た。女子高校三年生だが、小さい時に小児マヒをやって右の手足が不自由になった。生長するにしがたつて

不自由さが重荷となり、自分を生んだ親をうらんたり、元氣な友人たちがねたましかったりで、だんだんと自分をみじめにしていた。そして希望のない学生生活をすごすようになったのである。知人から、私のことを伝えきいたAさんは、母親につきそわれて私のもとに來られたのである。神が私を導いて下さった不思議を語り、手をにぎり「私たち二人だけで、肩を組んで醍醐の山に登りましょう。小さなことでよくよしてはなりません。私をここまで導いて下さった確かな『主』がおられるのです。お互いに祈り合って頑張りますよう」とはげました。Aさんは素直おに「はい、頑張ります」と答えた。クリスマスの近しいところ便りがあつた。受洗の決意が出來たことと、大學受験のために祈ってがんばっているという。希望にみちた内容の手紙でありました。

十一月の中旬のことでした。六月から点字の勉強に來ておられるKさんと宗教について語り合つた。五十才をすぎてから両眼を失明し、これまでにいろいろな宗教家がKさん宅を訪問され、そこで語られたことは先祖の罪や本人の罪であるとKさんを責める言葉でし

た。私たちが話のはずんだ時に「Kさん、せっかくならになつたんだから、一つ何かやりましょうや」と言つてみた。この「めくら」という思い切つた私の言葉にKさんは「よいことを言つてくれはるわ」と、手をたいて明るく笑われました。

五 祝 福

今年は、これほど盛大なクリスマスを迎えることが出來るとは想像もしなかつた。十月末から礼拝に出席されて求道中の、隣家のK夫人の子供さんたちと伝道所員は、キャロリングのための歌の練習を重ね備えてきた。

二十四日は教会学校の子供たちも加わり二十名くらいで聖歌隊を組み、町をキャロルすることが出來た。教会学校の子供たちの家族も、玄關まで出迎えて、イエス・キリストの御降誕の喜びに、敬虔な気持ちで耳を傾けて下さつた。町中には讃美が流れ、喜ばしい聖夜でした。

私たちは、こうした喜びのうちに床につき、夢うつつに聞こえてきたのは、予想だにしない歌声でした。伝道所の者はみなとびお

き、ローソクをともして玄關に立ち、共に讃美したのである。

クリスマス天使の歌におきいでて

共に讃美する 今年前二時

「クリスマスおめでとう、頑張つて下さい先生」と声をかけてくれるあの兄弟、あの姉妹たち。そして感謝の握手。この、醍醐の開拓伝道のために、私たちが床についている時にさえも、祈つていて下さる多くの方がおられたのです。私たちは、こうした祈りに支えられていることをあたらしく自覺し、クリスマスをむかえました。

その時の礼拝は、十一名の方々と共に祝うことが出來ました。

(昭和41大神院卒・醍醐伝道所伝道師)

×

×

×

×